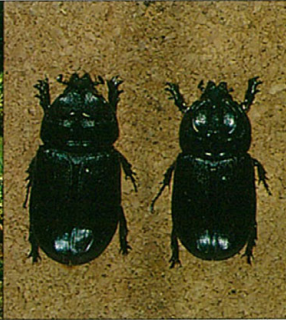


## 各地で話題の病害虫



ユリ茎腐疫病の被害畑



台湾カブトムシの成虫

標本：沖縄県農業産課植物防疫係提供



TNVによるえそ症状



ムギダニによる被害

群馬県農業総合試験場 高山隆夫氏提供

### ユリの茎腐疫病 (仮称)

学名: *Phytophthora* sp.

テッポウユリの主要産地である沖縄県では、数年前から“水腐れ”と呼ばれる病害が発生しており、横浜植物防疫所調査研究部で原因究明の試験を進めてきた。現在のところ、ユリの病原として報告のある *Phytophthora cactorum* および *P. nicotianae* var. *parasitica* とは異なる疫病菌が病原であることが判明している。

本病は、排水不良なところや、うね間にたまった雨水の影響を受けやすい株に発生が目立ち、雨の多い年はその発生が多いといわれている。

本病に罹病したテッポウユリは、地際部の茎葉が褐変し、茎内部も褐変・空洞化する。特に球根に近い部位に激しい症状が認められる。

接種試験では、テッポウユリとスカシユリに対して病原性が認められた。特にスカシユリの病徴は激しく、株全体が水浸状となり倒伏・枯死した。

り病組織中には、無隔の菌糸体と卵胞子が多数観察される。本菌は、遊走子のうを形成しにくい菌のようであるが、その形状は乳頭突起のない洋ナシ形、レモン形、長楕円形等である。蔵卵器は球形で表面は平滑、薄膜、無色で卵胞子を1個内蔵する、蔵精器は同株性で側着する。生育適温は26~30℃。

防除法としては、排水をよくし、発生地での連作を避けることが有効と考えられている。しかし本病の発生生態について不明な点が多く、防除薬剤や抵抗性品種の導入については今後の研究に待つところが多い。

### 台湾カブトムシ

学名: *Oryctes rhinoceros* L.

英名: Coconut palm rhinoceros beetle

沖縄県では、台湾カブトムシがヤシ類を食い荒し問題になっている。被害場所は主に公園、海浜、街路等で、5月現在被害に遭ったヤシ類は9,000本余にのぼっている。ほぼ壊滅状態に陥っている地域もあるが、決め手となる防除法がみつからず、地元ではその対策に苦慮している。

本虫は、台湾、韓国、東南アジア、インド、ハワイ等に分布し、沖縄では、1922年石垣島で初めて発生が記録され、その後南大東島、沖縄本島へと分布を拡大した。被害が顕在化しはじめたのは1975年頃で、糸満市摩文仁の平和記念公園ではヤシが全滅した。1979年には南部の大部分の市町村で大被害が生じ、現在は本島のほぼ全域に発生が及んでいる。

成虫は、カブトムシより少し小型で、体長40~47mm。体全体が黒褐色で微光沢があり、前胸が少しへこんでいる。角は短く、雄3.5~7.5mm、雌1.5~

4.0mmで分岐しない。雌は腹部下面に毛を密生する。

夜間に活動し、主にヤシの葉柄基部から食入して心葉部を穿孔加害する。加害後展開した葉は葉柄が著しく傷つけられたり、葉がはさみで切り取られたような状態になる。生長点まで加害を受けたヤシはやがて枯死するが、生き残った株でも生長点に異状を生じ、新芽は萎縮し生育が悪くなる。葉柄基部にあけられた虫穿からは繊維が多量に排出されているので本虫の食入が確認できる。

現在行われている防除方法は、被害木の伐採・焼却、立木へのダイアジノン・DMTP等の薬剤散布、あるいは本虫が好んで生息するたい肥やバガス（サトウキビの搾りカス）中に粒剤や粉剤を混ぜ発生源を断つことなどである。

### チューリップえそ病

ウイルス名：Tobacco necrosis virus

本年4月、新潟市で栽培されていたチューリップから、同県の一般栽培ほ場では初めて Tobacco necrosis virus (TNV) の発生が認められた。

同県は、県内の発生調査を実施し、新潟市のほか2郡の85.5haに発生していることを確認した。

本病がわが国で初めて発見されたのは、昭和42年、新潟県下で隔離栽培中のオランダ産チューリップからであった。一般ほ場においては、昭和51年に富山県の輸出用チューリップに発生したのが最初であった。富山県では、連作を避け、り病株の抜き取りなどの防除を実施してきたところ、現在、一部の地域で局所的に見受けられる程度で、大規模な発生にはいたっていない。

病徴は、初め灰白色で凹状の小さな斑点が葉脈に沿ってとびとびに出る。この斑点は後に大きくなり、紡錘形の黒褐色えそ斑点となる。このえそが葉脈に沿ってのび、えそ条斑となったり、互いに癒合したりする。激しいものでは、えそのため葉がひきつれたり、葉が褐変する。茎にもえそが見られることがある。ほ場では、TNVは、藻菌類の1種 *Olpidium brassicae* により伝搬される。

本病が最初に発見されたのはオランダで、1928

年頃チューリップの Augusta という品種にえそ病を起す病害として非常に恐れられていた。

ほ場においては、土壌伝染する病害であるため、防除の困難な病害である。

防除法は、り病株の抜き取り、土壌消毒、連作の回避、排水の良いほ場を選ぶことなどである。

### ムギダニ

学名： *Penthaleus major* Dugès

英名： Winter grain mite

ムギダニは、従来から畦畔や麦・飼料畑等で、冬から春にかけて普遍的に発生がみられていた害虫であるが、今年、関東地方の一部（群馬・埼玉等）で異常発生し、水田裏作小麦では本虫による枯死株がみられた。発生密度は株当たり2~30頭と高く、葉が見えなくなるほど密集しているものもあったという。被害は、ばらまきほ場に限られており、秋期にわらをすき込んだほ場では生息密度が高い。群馬県では、アブラナ科野菜、オーチャードグラス、イタリアンライグラスへの被害も認められている。

本虫は、ハシリダニ科に属し、体長約0.8mm。胴部は黒色であるが、後胴体部背面の一部、口器及び脚が赤色。夏を夏眠卵で過ごし、晩秋に出現して春まで活動し、夏季には姿を消す。昼間は光と高温を避けて、寄主植物の株元や土壌中の間隙にひそんでおり、曇天時や夕方になると葉に移動し吸汁、加害する。卵は、植物の基部や根部に産み付けられる場合が多い。

寄生が激しい場合には、ダニの銛角によって葉の表面細胞がこすられたり、吸汁されて表面細胞の内容液がなくなる。葉はしだいに緑を失ってかすり状に白っぽくなり、葉身はしおれ、ついには褐変する。

防除薬剤としては、MEP剤、PAP剤等が用いられており、曇天あるいは夕方本虫が葉に移動してきたときに散布すると防除効果が高い。また、連作によって被害が大きくなるといわれているので、輪作を行うことが望ましい。